

徒然なる診療日記 ～猫の恩返し～

兼光弘章[†]（梅美台動物病院院長・京都府獣医師会会員）

京都府と奈良県の県境に開業して10数年。開業当時、病院の周りにはほとんど建物はなく、区画整理中のヘンテコな広い道路とその向こうに一面の竹林が広がっているだけ。一度だけ奈良公園から「越境」されてこられた鹿と遭遇するような所だった。開業当時はラブラドルレトリバーやゴールデンレトリバーといった大型犬のブームが終盤にきていた頃で、特に彼らは外耳炎と股関節形成不全が多く、私も若かったこともあり、力いっぱい検査・治療をしていた。大型犬の診察が少なくなってくると、今度はミニチュアダックスフントやチワワといった小型犬の診察が増えてきて、代名詞といえる椎間板ヘルニアや橈骨・尺骨の骨折といった治療に大変苦労した覚えがある。また、時代の流れとともに病院の向こう側にあった竹林は宅地へと変わっていき、病院前の交差点に信号機がついた頃から、なんとなく猫の診察が増えてきたように感じるようになった。

日頃診療をしていると、一番多い患者さんはやはり犬だ。その次が猫。自分の周りにはいる一般市民の方を見ると、犬を飼いたい人、猫を飼いたい人、どちらが多いかという、圧倒的に犬を飼いたいと考えている人が多いと思う（あくまでも私の主観であるが…）。そんな中、子犬さん、子猫さんの成長と、そのご家族を日々の診療を通してみていると、大きな違いがあるように思えてならない。子犬さんの場合、すべて当てはまるわけではないが、「この子、トイレのしつけが出来なくて」とか、「飼い主の言う事を全然聞かなくて。頭悪いのかしら」といった、ある種、嘆きのような飼い主さんの言葉を診察時、耳にすることが多い。反対に子猫さんの場合は、「先生、見て見て、こんなにかわいくなってん」とか、「やんちゃで仕方がないんです。ねーお父さん」という歓喜とも取れる言葉が多く、お二人の間での会話もカップルどうしが「お父さん」「お母さん」になっていることが多い。また、若い夫婦で犬を飼い始めた夫婦と、猫を飼い始めた夫婦では、猫を飼い始めた夫婦の方が早くお子さんに恵まれているような気がしている（あくまでも私の主観である。あくまでも）。

このことを助産師をしている嫁に話すと、「ホンマや

ね。犬の出産って、帝王切開ばかりやもんね、安産の象徴やのに」と、言っておられた（これはあくまでも言い伝えである）。

これはどういったことかと考えてみると、最近の傾向として子犬の場合は、理想的なドックライフを想像しつつ、ペットショップなどで選ばれ、待ちに待ちこがれてから家にやってくるのに対し、子猫の場合は確かにそういう場合ももちろんあるが、ほとんどの場合、道端で何か鳴き声がしている段ボール箱を開けてみると、目と鼻がくちゃくちゃになった子猫が数匹。「あつ、開けなければ…、しかし放っておくわけにも…」結局、見るに見かねて保護し、仕方なしに家で飼うことになる方が多いのではないだろうか（あくまでも主観である）。

そうか。子猫はきっと飼い主とその家族に恩返しをしているのだ。決して犬がダメと言っているわけではない。ただ、DVDの「にゃんこ the ムービー」は全巻揃ってしまったが、「カイ君の…」は「…」であった（あくまでも私の主観である）。当然私の携帯電話はドコモのままでスマホではない。

ちなみに私の家には猫が9匹もいる。もちろん段ボールの箱に入ってやってきた子猫もいるが、中には自分で歩いてやって来て私に「にゃ」と言ったつわものもいる。さて、どの猫から恩返ししてもらおっかな。はたまた、今が平穏無事で暮らせているのがすでに恩返しだったりして。

兼光弘章

—略歴—

- 1995年 岩手大学農学部獣医学科卒業
- 同年 奈良県山尾獣医科病院に勤務
- 2000年 梅美台動物病院開業



[†] 連絡責任者：兼光弘章（梅美台動物病院）